

【学会レビュー】

日本死の臨床研究会第33回年次大会

— 命をみつめ、心を結ぶ、今すべての人と —

(名古屋国際会議場, 2009年11月7, 8日)

宮坂 万喜弘

今年は11月7日8日に名古屋国際会議場で開催された。— 本当に大切なものとは何か、人と人の心は結ばれているかを共に考える今年の大회는、まず「ホスピスへの遠い道、その歴史と現在・未来 — マザーエイケンヘッドと岡村昭彦」のシンポジウムが大会長挨拶の後岡村の生前に親交のあった人々、評論家の米沢慧氏、元岐阜大学医学部教授細野容子氏、滋賀里病院院長・理事長栗本藤基氏、にのさかクリニック・二ノ坂保喜氏、特別発言：上智大学名誉教授アルフォンス・デーケン氏により行なわれ、それぞれの岡村を紹介した。若くして第2次大戦の日本国家の敗北を体験した岡村は、社会の根幹の「人間の権と尊厳」をこの時痛感する体験をする。名門の出身であった岡村家の長男昭彦は、東京空襲の爆撃ですべてを失った。その後の家族は当時の混乱に飲み込まれて過酷な日々の中で過ごしたのであった。日本医大の学長であった伯父のもと、彼は医学の道に進もうと志ざした。ひとたびはすさんだ心を立て直す努力をするが、学生運動の波が沸きあがった時、当時の軍国少年として育てられた若者達には、民主主義の社会実現の契機だと映った。しかし当時の社会指導者の不誠実な姿が彼らの期待を裏切っていくのを見た。社会の歴史が庶民とは関係のないところで、無責任で無節操な指導者たちによって方向付けされて行くことに強い憤りすら覚えた若者達の中に彼もいた。彼は日本の将来を思い、真相の究明をする決心をしたという。医学の道から離れて、社会の現実の問題に体ごとぶつかって行

く。今後日本は戦争を起こさない、起こさせないための課題を、岡村は自分なりの計画に基づいて実践することになる。

32歳の時、ベトナム戦争の只中、彼はアメリカ軍のベトナム戦争に密着する。指導者たちの行なった事績を検証し、それを上回る情報を集めようとする。現場に赴いて自らの理性で確かめ、真実の判断材料に基づいて熟慮し、南ベトナムの戦場での情報操作、民衆の苦難、指導的当事者の行なっている裏切りの実体を自身の目で確かめ、その証拠写真をアメリカ国民は無論のこと、日本の社会にも届けようとした。しかし日本の報道界はこれを知りながら国民に伝えることは無かった。全てを知りつつ無視した。アメリカで突然『Life』誌がこの報道を大々的に掲載、岡村のこの7枚の現地からの『Life』に掲載された写真が、アメリカで人々の意識を揺り動かし、大きな社会問題となり、ベトナム戦争を終らせる引き金になった。アメリカでの騒ぎが日本社会にこだました結果、大衆は始めて岡村昭彦という日本人を知るのであった。よし悪しは抜きにして、真実の勇氣ある情報が結果として世界史的戦争を終わりへと導いた。これほど情報の重さが明らかにされたことは少ないであろう。岡村の戦争報道と並行的に『Life』に掲載された医学の最前線特集（Control of Life 生命操作）の内容の試験管の中での生命群、人口胎盤、動物の貸し腹、臓器移植、人口臓器、遺伝子操作、死の判定などの問題が続いた。戦場でアメリカ軍の枯葉作戦を目撃した彼の目に、この特

集は「死の最前線レポート」と映ったのである。

「21世紀は人間あるいは生命という概念は拡張されるだろう。」「問題として問われるのは生命である。」「生命操作が可能な時代の倫理」が語られるべき事と解した岡村は、このときからホスピスの活動は人権運動であると受け止めたのだった。人間の尊厳・人間の権利を考えることが、これからの社会ではキーワードとなる。日本のホスピス運動の黎明期において岡村は医療者・臨床家たちと違う立脚点からホスピス運動にかかわった第一人者であったといえる。

1980年初頭、友人であった木村利人米国ジョージタウン大学ケネディ研究所バイオエシックスセンター教授と日本全国各地の医師会、大学医学部、病院、消費者グループ、キリスト教関係団体などで講演会を行なった。精神病院で管理されている患者の人権を如何に守るのかなどこのとき以来(生命倫理)の言葉と彼らの学際的な運動が、日本にまで広く認知されるようになっていった。岡村昭彦のホスピスへの関心は、ベトナム戦争の取材を基点とする、人権運動と共にあった。岡村は、世界中をかけまわり、自分の知・情・意を含む五官を通じてさまざまな機会に、厳しく多様な情報を日本の医療関係者の人々に向け発信していった。しかし「人権と生命を守る」運動の激務を果たそうとした彼は、業半ばにして56歳の若さで世を去っていった。……奥さんと長男は今もアイルランドに在住である。

彼の研究は世界規模にわたり、政治・経済・歴史・思想・社会・民族・文化・音楽・医学・薬学・精神病理学など、ありとあらゆる領域を網羅した。日本を担う人々の精神水準を高め、豊かにするために活動したが、特に医療者の使命を重んじた彼は、日本でも終末期患者の医療に対する従来の治療を改善する手立てを始めたばかりの1980年代初め、日本の淀川キリスト教病院名誉ホスピス長

の柏木哲夫(金城学院大学長)と会った。その時「ホスピスや死の臨床の真髄は、平等意識だと思います」とホスピスの精神を語ったという。日本社会に初めてマザー・エイケンヘッドとホスピスの思想を「人権運動としてのホスピス」と捉えて紹介したのも彼であった。

生き物の定め、だれもが必ずこの世から去る時が来る。その時われわれはどのように去ろうと願い、また去る人を弔うか。少子高齢化の時代になって更に混乱が予測される社会での私達に「どう人間らしく生き、そして死を迎えられるのか」と岡村は今も語りかけている。

今年には岡村の生誕80年を記念する大会であった。特別講演では諏訪中央組合病院名誉院長の鎌田實氏の「恐れない——死をどう支えるのか——」、名古屋大学総長濱口道成氏「日本人の死について」、日野原重明氏と辰巳芳子氏の対談「食と命」、二日目も文化講演・柳田邦男氏の「物語を生きる——人間の生と死——繋がる命、つなげるケア」を最初に、セミナーの柏木哲夫氏(金城学園学長)の「生命といのち」があり、ふじ内科クリニック院長・内藤いずみ氏の「ホスピスのこれまでと・今・に立ちあって」、シンポジウム「いのちの教育」、「地域・在宅ケアにおける緩和ケア」、「命の授業」などがあった。またワークショップ、体験講座・市民企画など、事例検討16題目、演題(講演や含ポスター発表)212題目、それに静岡県立大学の付属図書館の岡村昭彦文庫からの岡村昭彦のアメリカ、イギリス、他のヨーロッパの国々から集めてきた収集書籍(多くの分野に及ぶ原典、資料、著書なども含めて16,000点)の中の一部や、彼の部屋の写真が展示され、13会場で同時平行的に展開された。今年の参加人員は3,076人であった。来年度の会場は盛岡市である旨が伝えられ、懇親会は盛会であった。